

# 奨励賞 「高架下の余白～通過する駅から、集う駅へ～」



## 高架下の余白 ～通過する駅から、集う駅へ～

本計画は、日々通り過ぎるだけの駅前空間を、木の温もりによって人が立ち寄りたくなる「街の玄関口」へと再生することを目的とする。現在、半田駅周辺では鉄道高架化の工事が進行しており、その途中で生まれた高架下空間は、無機質で冷たい印象を与えている。しかし、駅前は本来、人々が最初に街と出会う場所であり、地域の魅力や温度を感じられる空間であるべきだと考えた。本計画では、ダブルティンバー構法を採用し、大スパンを実現しながら木のあたたかみを取り戻す構造とした。さらに、木工房・カフェ・木材ストックヤードを配置することで、環境に配慮しつつ、人々が滞在したくなる空間を創出している。「電車で通り過ぎるだけの場所」から「街の温もりを感じる玄関口」へ。木の力で、人と街と鉄道をやわらかくつなぐ建築を目指した。

### 1 敷地背景



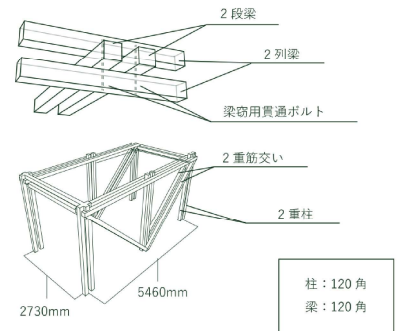
<過去>

<現在>

本計画では、知多半島の中心に位置する JR 半田駅前を敷地とする。半田は船造業と運河により発展し、木造の街並みや倉庫群が景観を形づけてきたが、近年は区画整理や高架化により空き地化・分断が進み、滞在機能が失われている。



### 2 b. 提案 ダブルティンバー

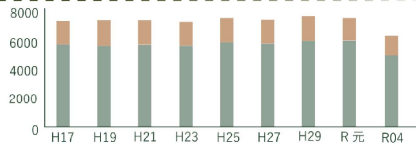


ダブルティンバー構法は、木材を二重に組み合わせることで大スパンに対応できる強度と安定性を実現する木架横システムである。柱を二重部材構成とすることで荷重を分散し、木目や質感をそのまま出すことで、コンクリートや鉄骨にはない木の温かみや柔らかさを引き出せる。特殊技術を必要とせず地域の施工体制にも適用できるため、地域材の活用や地産地消にも大きく貢献する。

### 2 問題提起



<人が不安に感じる箇所>



<鉄道駅一日乗車人数> ■ JR 半田駅 ■ 名鉄知多半田駅  
JR 半田駅は、名鉄半田駅に比べ鉄道利用率が低く、人口減少や空地化によって滞ることができる場所も少ない。その結果、駅前には人が立ち寄りず、通過するだけの空間となっていることが課題である。

### 3 a. 提案 フェーズ 地域木材を半田運河で運び、高架下にストック。駅前の木質化

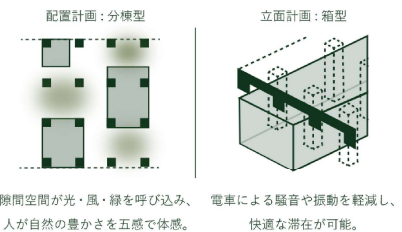


水運による低エネルギー輸送  
街全体に木材利用を促進することで、資材の循環利用を図り、資材運用フェーズとしての機能を果たす。

高架下木材ストックによる炭素固定

街全体に木材が広がる

### 3 c. 提案 高架橋との関係



ストック

高架下に流通材をストックし、木材の環境浄化機能を活かして、排気ガス中の汚染物質の吸収や炭素固定を目指す。



工房

ストックヤードで保管された資材を活用することで、利用者が木材の加工や再利用に関わる機会を得られる仕組みを構成。



ギャラリー

既存の鉄道資料館を移転し、来訪者が地域の歩みや鉄道の歴史を学びながら、半田の街の魅力を感じられる展示空間を創出。



屋上テラス

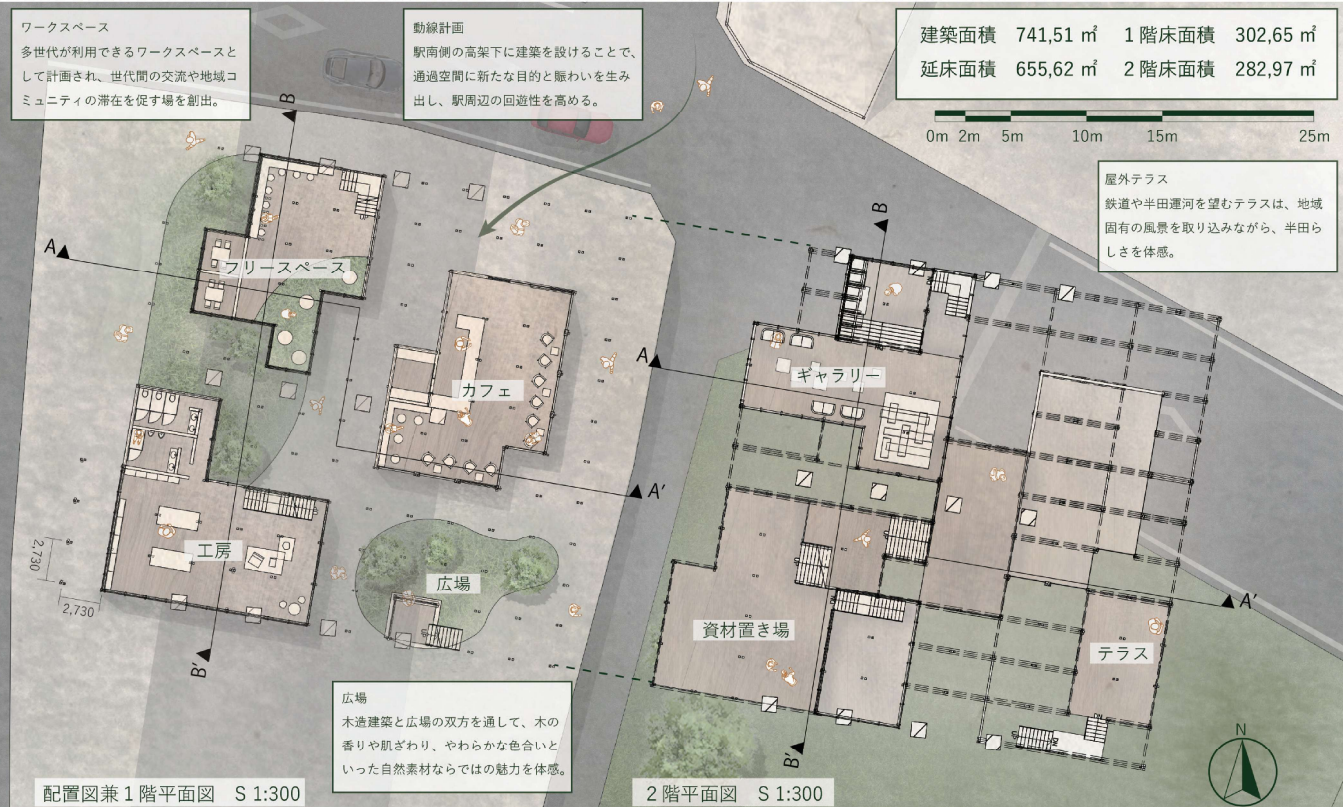
屋根を曲線形状とすることで、木材のしなやかさを活かし、やわらかく包み込むような形態によって、街の景色を楽しみながらやすらぎと開放感を感じられる憩いの屋上テラスを創出。

配置図兼平面図 S 1:300



室内広場

開放的な広場を形成し、木の架構や素材を活かすことで、自然素材に包まれながら、人々が滞在し木造の魅力を感じられる交流空間を創出。



立面図 S 1:300

